

なぜ勉強するのか

前期中間考査が終わり、ホッとしている生徒がたくさんいることと思います。

1年次生は、高校での初めての考査ということもあり、不安と緊張で考査に臨んだことと思います。3年次生は、仮評定が出る考査ということで普段より熱を込めて勉強したのではないのでしょうか。

そのような中でも、「これって成績に関係あるの?」「これを勉強して人生で役に立つの?」というような言葉を耳にすることがあります。そのようなことを思ったことのある人はたくさんいると思います。私も学生の時分、そう思ったことがある一人です。

ただ、この問いの一つのヒントになりそうなエッセイを見つけましたので、紹介します。北海道出身の作家、小檜山 博 さんが、学校での講演を依頼されることが多くなり、それに関連してのエッセイです。皆にとって少しでも学ぶことに意義を見いだせるよう期待します。

~~~~~

僕が高校生に話してきたことの第一は体を鍛えること、第二に母語を学ぶこと。体とは肝、つまり気力や精神のことで、その均衡感覚を育てて両足でしっかり立てる体をつくって自立神経を養う。

勉強はすでにできている知識をおぼえることをとおして、自分独自の考えを生み出せるよう頭を鍛錬することのはず。学校は社会へ出て自分で考えて生きていけるよう、勉強をとおして生き方を学ぶところ。僕のような気まぐれで我が侘で怠け心の多い浅はかな性格の者が、それに打ち勝つための鍛錬をするのが学校での勉強だろう。

教育で積まれると考えられる学力とは点数に表れるものでは、勿論ない。生徒それぞれが**自分で学び取る生きる力をことを学力と、僕は考えている。**

その生きる力とは何か。第一に自分以外の他人の心を感じ取る力、第二に他人と協力し合うことのできる力、第三に自分の感情を操作、調整できる力の三つをいうと考える。

勉強は一つの問題について徹底して考え続ける習慣を身につけることから入ると思う。問題を解けなくてもわからなくても、それはそれで仕方ない。**要は懸命に考え続けることが勉強の本来の目的である姿だと考える。**

つまり勉強は問題を解いて答えを出した回数が多いから学力がついたというだけのものではなく、**考えた深さと考えた回数と時間の多いぶんだけ理知がついて明敏な思考力、判断力、批判力が備わるのではないか、その先に生きる力が育つと、僕は思うのである。**

多くの人の場合、理科で学ぶのは理科的思考ができるようになるため、数学も国語もまた同様に、教科はそれ自体だけの知識が目的ではなく、**重要なのはその教科が持つ思考形態から多彩な形の考え方、考える力を得ることだろう。**そこから生きる力が養われると、僕は思



う。勿論これらは、あくまで僕個人の考え方である。

教育という言葉がある辞典でみると「社会人としての人間形成などを目的として行われる訓練」とある。この説明に学問とか勉強の文字がないのが興味深い。ある辞典で勉強を引くと「学問や仕事などにつとめ励むこと」と、「仕事」という文字があって、僕は大いに喜んだ。勉強の意味が知識や単位や資格を得るためではなく、**仕事に頑張ることも勉強だということである**。これは嬉しい。

ということは、僕が小学生のとき父母の農業を手伝ってジャガイモ植えや麦刈りをしたのは勉強になるからだ。茶の間の雑巾がけや豚の餌やりや風呂たきも勉強だったのである。当然のこと学校の校庭の草むしりや教室、廊下、トイレの掃除、校舎の屋根の雪おろしも立派な勉強だったのである。僕はテストの問題を解く能力は身につかなかったが、沢山の勉強をしてきたことになるのである。辞典に仕事と書いてあるのだから間違えない。



僕自身、習ったもので役に立ったものは母語とかけ算の九九だ。他におぼえているのはオームの法則とかピタゴラスの定理などほんの少して、後はすべて忘れてしまった。これは僕の脳味噌の活動が弱いためだから仕方がない。

ただ僕は別にして、教育とは忘れてしまった後に残るものことだというのではあるまいか。

小檜山 博 「忘れたあと」より

---

【小檜山 博】(こひやま はく)

作家。北の映像ミュージアム館長。ゆうばり国際映画祭・実行委員長。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。